

# かながわ 助産師職能だより

第44号  
2021年8月1日発行

公益社団法人神奈川県看護協会 助産師職能委員会 発行責任者 布施 明美

〒231-0037 横浜市中区富士見町3-1 TEL: 045 (263) 2901 FAX: 045 (263) 2905  
E-mail kanakan1@basil.ocn.ne.jp URL <https://www.kana-kango.or.jp>

## ごあいさつ

### 「一期一会」

三伏の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素、会員の皆様には当委員会の運営にご協力とご理解を賜り厚く御礼申し上げます。

この度、ご尽力いただきました藤波富美子委員長の後任として拝命いたしました布施明美でございます。微力ではございますが、神奈川県看護協会の理念である3つの精神(こころ)

**生命**: 誕生から終焉まで、尊厳を守り、真摯に命と向き合う精神(こころ)

**自律**: 自己の規範を確立し、誠実に行動する精神(こころ)

**情熱**: 何事も熱意をもって取り組み、成し遂げようとする精神(こころ)

を念頭に置き、周産期医療の質の向上、母親・家族が安心できる妊娠中から子育てまでの切れ目のない支援について尽力してまいりたいと存じます。どうぞよろしく願い申し上げます。

さて、昨年からのCOVID-19感染の発生により社会が大きく変化しました。対面による両親学級や分娩の立ち合いの中止そして入院中の面会など様々な制限をする事態になり、ますます母親の孤立化を助長し、産前産後のメンタルヘルスが大きな課題となっています。

また少産少子高齢化が加速しています。2019年では出生数が86万人となっています。背景には日本が抱えている社会課題として若い男女への健康教育が十分なされていない現状があります。意図しない妊娠や児童虐待、性暴力、

性感染症と様々なリスクに晒されている子どもや若者が自分自身の身を守る知識やスキルを学び健康増進し、将来の子どもたちの健康の基盤を作るために必要なプレコンセプションケアが必要と考えます。

また出産の動向を鑑みると高齢出産の増加に伴いハイリスク妊産婦やハイリスク新生児の増加により質の高いケアが求められます。以上のことから助産師の正確な知識・技術と判断力そして看護の本質を大切にする人材育成が必要と考えます。この委員会活動を通じ神奈川県内のそれぞれの助産師が持つ英知を結集し、専門職である助産師の力を大いに発揮し発展していけるようご支援する所存でございます。

県内の様々な場所で活躍する助産師の皆様と連携し助産師職能委員10名と共に助産師の活動を推進してまいります。どうぞ当委員会活動へのご参加ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



助産師職能委員長  
布施 明美

## 2021年度 助産師職能委員紹介

助産師職能委員長	布施 明美	会 計	熊丸 真奈美
副委員長	平林 奈苗		土井 秀子
書 記	松原 里美		中村 綾美
	藤谷 直子		諏訪 和美
	関口 保子	広 報	岩田 光代



\*\*\* 2021年度 \*\*\*

## 助産師 職能研修予定

(敬称略)



### 今さら聞けない分娩介助基礎技術

開催日◆ 2021年7月21日

講師◆ 山本助産院院長 山本 詩子

### 生殖・不妊治療

開催日◆ 2022年1月21日

講師◆ メディカルパーク横浜院長 菊地 盤

### CTG 判読と母体感染のリスクと対応

開催日◆ 2021年10月22日

講師◆ 神奈川県立こども医療センター副院長 石川 浩史

### 周産期メンタルヘルス

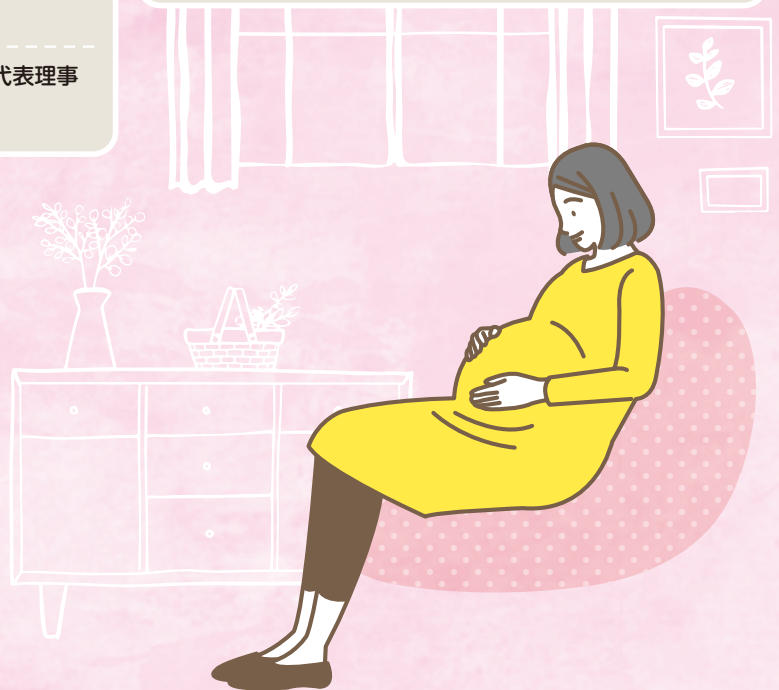
開催日◆ 2022年2月21日

講師◆ 北里大学看護学部看護学科 生涯発達看護学 准教授  
新井 陽子

### 思春期の性教育

開催日◆ 2021年11月19日

講師◆ 子育てサポートハウス marimo 助産院代表理事  
中島 清美



# \*\*\* 2020 年度 \*\*\* 助産師職能委員会 活動及び研修会 報告

職能委員会・職能集会

2020 年 7月17日(金) 研修会「今さら聞けない分娩介助基礎技術」

◆ 山本助産院 院長 山本 詩子

8月28日(金) 職能委員会

9月25日(金) 職能委員会

職能委員会

10月23日(金) 研修会「CTG 判読と母体感染のリスクと対応」

◆ 神奈川県立こども医療センター 産婦人科部長 石川 浩史

職能委員会

11月27日(金) 研修会「災害時母子救護の現状」

◆ 神奈川県立保健福祉大学ヘルスイノベーション研究科  
教授 吉田 穂波

12月23日(水) 職能委員会

職能委員会

2021 年 1月27日(水) 研修会「思春期の性教育」

◆ 子育てサポートハウス marimo 助産院 代表理事 中島 清美

職能委員会

2月25日(木) 研修会「性感染症の支援」

◆ 芝レディースクリニック 副院長 秋好 順子

3月19日(金) 職能委員会

4月23日(金) 職能委員会

5月28日(金) 職能委員会

6月25日(金) 職能委員会



助産師として分娩に携わり、日々自分の分娩介助に対してどうすればもっと産婦に寄り添うことができたのか、スムーズにお産を導くことができたのかと反省を繰り返していました。そのため今回は、初心に戻り分娩介助について基礎から学びなおしたいと考え、研修に参加させて頂きました。

今回の講義では、分娩進行の様々なサインや努責誘導の仕方、進まない分娩の際の内診所見のポイントや回旋異常時の修正方法などの基礎的なことから、山本先生の経験から学んだ知識や技術まで学ばせて頂き、3時間あっという間の時間でした。

特に肛門保護は粘膜を傷つけるため最小限にとどめること、また体幹娩出の際に腋下へ手を入れないこと、というポイントが印象に残りました。学生の頃から児娩出の際には腋下に指を入れ児の墜落を防ぐようにと学んでいましたが、娩出時に児頭娩出後に会陰裂傷してしまう事がありました。腕の上からそっと体幹を支え、腕をぐっと縮めることにより最小周囲径で娩出する、と教えて頂いたポイントを次回の分娩介助の際に実践した

いと思いました。

また、講義の中でミッシェル・オダン氏の「新皮質への刺激から守ることが重要であり、沈黙が大切で声を掛ける際にも慎重に言葉を選ぶ」という言葉や、先生の産婦の呼吸と動きを感じて沈黙の中で静かに分娩介助をする、という言葉が印象に残りました。わたしは普段分娩介助の際、特に努責誘導の際は大きな声を出して声掛けをしていました。産婦にもっと安心して自分の力を発揮してもらうためにも、声掛けやお産の環境作りから改めて見つめ直していきます。

そして、講義の中で分娩時のDVDを拝見しました。静かな分娩介助で産婦自身の産む力を最大限に生かした分娩であり、とても感動しました。今回学んだ介助方法を生かすとともに、産婦が安心して満足できるような分娩となるよう今後も研鑽を積んでいきたいです。





## CTGの判読と母体感染のリスクと対応を受講して

済生会横浜市東部病院 助産師 ◆ 與吾 友里

今回私は初めて神奈川県看護協会の研修に参加しました。この講習の面白かった所は、何問か問題が出てくるのですが、スマートフォンを使用し、実際に自分の正解だと思うものを送信することで講師側に集計結果が送られ実際に受講者がどう考えたかがわかったことです。コロナ禍でグループディスカッションがなかなか行えない状況であり、他の受講者がどういったアセスメントをしているか見えたことは、自分とは違う考え方なども分かり勉強になりました。CTGの判読と母体感染のリスクと対応の講習での学びは大きく2点ありました。1点目はCTGの判読の中で“まず基線を見よう”ということです。勿論、常日頃から基線にも注意してCTGは見ていましたが、やはり一過性徐脈に目がいってしまいがちでした。以前急速遂娩を行った事例で一過性徐脈がなくなったと思ったら、基線が160bpm以上であり、娩出した児は蘇生処置が必要でした。新生児科医とも徐脈をもう出せ

ないくらい限界に来ていたから頑張っていたんだらうね、と話したことを思い出しました。基線が頻脈なだけでは異常とは言い切れませんが、基線の異常はないか、あるのであれば原因は何なのかをアセスメントしながら日々の業務に活かしていこうと思いました。2点目は、妊産婦の劇症型A群連鎖球菌感染症(GAS)についてです。まず、近年では妊産婦死亡の割合として、産科危機的出血と同じくらいの割合を感染症が占めていることに驚きました。GASは、正直初めて聞いた感染症でした。症状が出てから急激に悪化し、最悪の場合は死に至ってしまうというもので、2つの事例(助かった事例とそうでない事例)を比較し、どの対応が良かったのかなどを検討し受講者の考えたことが勉強となり、また防ぐためには早期においてGASを疑い迅速な処置を行うことが大切であると学びました。今後も今回の学びを忘れずに日々自分の知識を研鑽していこうと思います。



平塚市民病院 ◆ 大川 衣以子

病棟で災害対策を担当しており、以前より HUG に興味があったため今回の研修に参加しました。

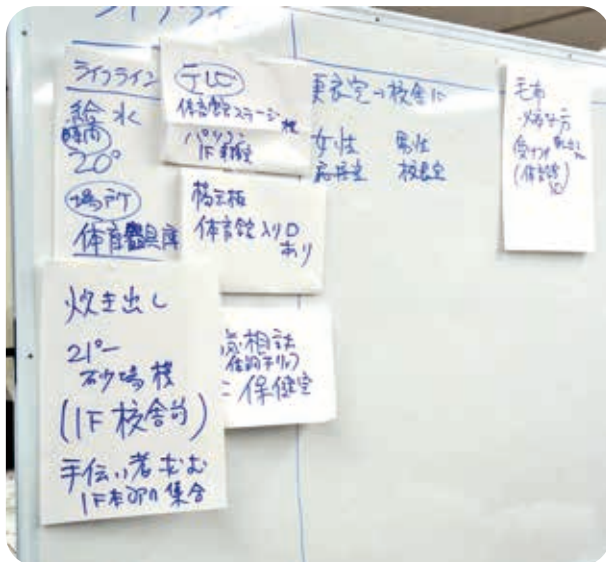
災害時は妊婦健診が受けられない、分娩場所がないなど医療を受けることが困難になりますが、そういった状況の中でも妊産褥婦は健康体と認識され、災害時弱者として扱われにくい状況があると学びました。災害の有無に関わらずいつでもお産が発生すること、また、災害によるストレス等で早産になるリスクや合併症の増悪等も起こりえます。そのため、どんな状況でもお産に対応できること、妊娠による合併症に備えることが必要だと改めて考えさせられました。さらに病棟助産師として災害時の対応を準備しておくことはもちろんですが、妊娠期から母親学級や助産師外来を活用し、日頃から患者さん自身にも災害時に困らないように考えてもらったり、準備できるように働きかける取り組みが必要だと感じました。

今回実際に HUG を行い、次々と避難所に人々が押し寄せる中、瞬時に的確に部屋の振り分けを行うことが簡単ではありませんでした。一つの部屋内の人数が多すぎてしまったり、逆に全く使っていない部屋があったり、また物資の把握やマスク対応など間に合わないことがあり、運営の難しさを実感しました。

その経験から災害に備えて、あらかじめ部屋の振り分けを想定しておく、役割分担を決めておくなど事前に準備できることがあると分かりました。また、妊産褥婦を理解した私たち助産師だからこそ、率先して対応していくことで妊産褥婦や児にとって、少しでも安全で安楽な避難所の運営ができるのだと感じました。

また実際の災害時には HUG の経験を活かして、微力ながら災害時弱者を支援できる避難所の運営に取り組んでいけたらと思います。

最後にコロナ禍での研修への参加で不安もありましたが、講師の吉田医師やファシリテーターの方々にご配慮頂き、安心して参加することができました。ありがとうございました。



横浜市立市民病院 ◆ 高野 しのぶ



私自身、思春期の頃に性教育の授業をうけてきたかと聞かれると、正直記憶がないです。修学旅行の前になんとか生理用品の使い方を習ったような、そんな記憶しかありません。また自分が親になり、性教育を子供にしようというとしても性行為について話さなければいけないとか、なんとなく話づらいことを話さなければいけないといった、陰な性教育というイメージしかありませんでした。

しかし、今回の研修を受けて、性教育とはそのようなマイナスイメージなことを伝える教育ではなく、きちんと自分や他人の命を大切に思えるよ

うに伝えること、思春期においては第二性徴をうけとめ、自分の身体の変化をしっかりと理解してもらうことで子供たちが社会から自分を守っていくことができるのではないかと感じました。

10代の死因の1位が自殺であり、日本の自己肯定感は諸外国に比べて低いといわれています。日々、命と向かい合っている医療職だからこそ命の大切さを伝えられることがあると思います。相模原で行っているように小学生から子供たちが自分たちの命や体を大切に思えるような授業を神奈川県全域で医療者が継続的にできたら良いと思いました。子供たちが性教育の授業について、「命の大切さを教えてもらった、これから大人の身体になって、こういう変化があるって教えてもらった」と返答できるような社会になれば良いと思います。また、最後のワークでは家庭の中で子供たちに聞かれてドキッと話す会話やシチュエーションについてどう対応するかを学ぶとともに、日常生活の中で性とは密接に共存していると感じ、日常の中で学校でも家庭でもそれぞれができる性教育ができれば良いと思いました。貴重な研修をありがとうございました。



私が今回この研修に興味を持ったのは、勤務先の外来に梅毒陽性の妊婦が何名か妊婦健診に来ていたことを知ったからです。外来カルテを読んでいくと、初めて梅毒について医師から説明を受けた妊婦の多くが戸惑いや不安感を抱きながら治療を受けていることがわ

かりました。また、クラミジア感染症の妊婦も多くみられますが、夫やパートナーが泌尿器科を受診しないままであったり、コンドームなしでの夫婦生活を持ったという事例もありました。性感染症の病態について再度学び、普段の業務やケアに取り入れていきたいと思い研修に参加させていただきました。

研修を受けるまでは先に述べた通り、梅毒やクラミジア感染症について学びたいと考えていましたが、子宮頸がんとHPVワクチンについての講習は特に興味深く、同業者や友人、家族にも伝えてあげたいと思うものでした。今回の研修を受けるまで、HPVワクチンは初交前の接種が有効であり、接種するのは女性のみと思い込んでいました。しかし、初交後でもワクチン接種の有用性はありリスクを減らせる



こと、さらに最近では男性の接種が始まっていることも知りました。男性がHPVワクチンを受けることで陰茎癌などを防げることや、将来出来たパートナーにHPVに起因するリスクを減らせることを考えれば、接種しないよりした方が良いでしょう。HPVワクチン接種に

よってもたらされた副作用についてをマスメディアが取り上げてから、ワクチン接種をためらう方、やめてしまった方は多くいらっしゃると思います。しかし、講師の先生がおっしゃっていた通り、ワクチンを接種したことによるリスクよりもメリットの方がはるかに大きく、ワクチン接種後の有害事象との因果関係も否定されています。現在日本ではHPVワクチンの接種率はかなり低く、ほとんど0に近い状態であるそうです。正しい知識と情報を伝えられれば、日本でのHPVワクチン接種率も上がっていくのではないのでしょうか。

今回の研修で学んだことをふまえて、今後どのように周囲に伝えていけばよいか、どのように関わっていくかを考えていきたいと思っています。



## 2020年度 助産師職能委員紹介

助産師職能委員長	藤波 富美子	会 計	中村 綾美
副委員長	川邊 康子		三浦 菜見子
書 記	松原 里美		熊丸 真奈美
	平林 奈苗		土井 秀子
	藤谷 直子		二見 智枝子
		広 報	鈴木 千秋

